



ヨーロッパの自然保護

重岡 義雄

わたくしたち日本人は、昔から自然を

になる。

愛する国民だとうぬぼれていたが、最近
観光開発や住宅団地造成などにみる「自
然破壊」の実状を見せつけられると、わ
れわれ国民の「自然を愛する心」は、ヨ

わたくしは、先年、ヨーロッパの主要
都市を見る機会にめぐまれたので、その
印象をここに紹介して、読者の参考とし
たい。

ライン河の水

ロッパ人のそれとちがって、何か消極
的なような気がしてならない。これまで
美しい景色に恵まれ過ぎたせいかもしれ
ないが、もっと積極的に「自然保護」を
しなければ、悔をあとあとまで残すこと

日本では、東京の隅田川の黒く油ぎっ
た河水を例にひくまでもなく、われわれ
の住む北海道の代表河川である石狩川の

汚染が問題となり、そのおよぼす被害で沿岸の農民や漁民への損害補償が論議されているが、石狩川の水は、いっこうにきれいなならないのはどうしたことだろう。

三十年ほど前には、旭川市でも石狩川をさかのぼるサケの群を、橋の上からはつきりと見ることができ、その壮观さを楽しんだものであったが、こんな話も、いまの若い人々には、夢物語りぐらいにしかひびかないかもしれない。

二年ほど前、ヨーロッパ旅行で私たちの目に不思議にうつったものは、大都市や大工場地帯の間を貫いて流れるライン河、セーヌ河やテムス河などが、いい合わたしたかのように、河水がきれいなのに驚いた。

どうも合点がゆかないので、そばにいた独乙人のガイドにそのわけをきくと、答は簡単であった。「ヨーロッパの個人主義が、ここまで発達したせいだ」というのである。個人主義や利己主義が、はつきりしていない私どもの頭には、ガイドの言葉がすぐ理解できなかつたので、なお突っこんできくと、恥かしいことではあったが、個人主義の定義をきかされるような羽目になってしまった。

「個人主義は自分の生活を大切にするばかりでなく、他人にも決して迷惑をかけたことだ」このような考え方が徹底したせいだというのである。もつとも、工場の施設や公共の下水道が、この考え方のもとでつくられているから、川にはいる前に、下水道の水は、すでに浄化されていることになる。

自分の利益の前には、他人のことなど少しも考えない利己主義者がはばを利かしているあいだは、石狩川も「百年河清をまつ」ということになるだろう。

公園のリスたち

リスと遊ぶ自然公園の設置を念願としている私は、ヨーロッパのどこかで、これに類した施設をぜひ見たいと考えていた。かねて、ジュネーブの公園にはリスのいるところがあるときいていたので、それを目当てに下手な英語で道をききながら進んでゆくと、市街のすぐ近くで静かな公園が見つかった。

公園の中は、朝の時間の早いせいもあって、人通りはまばらであった。木立の根元近くの芝生に目をそそぐと、黒いかげが芝生を横切って走っているではないか。はやる心をおさえてよく見ると、そ

これは、子供の絵本の中でよくみかける可愛いリスであった。このリスたちは人を恐れることを知らないかのように私の足元まできて、またすぐべつの方向へ去って行くので、落ちついて写真をとることもできないので困っていた(リスの餌をもって行くのを忘れたので)。

まったく幸いなことには、親切そうな老人がリスに餌をやっているのに出会ったので、その老人にわけを話して、いろいろなポーズをとってもらった。タイトル・バックの写真は、そのときの写真の一つである。もっとも、この老人は英語はほとんど解からないらしかったが、こちらが真剣になれば、手真似だけでもよく意味が通じるものだと、はじめてわかった。

またこの公園では、リスばかりでなく名も知らぬ野鳥が、どこからともなく飛んできて手の上にとまるので、こんな経験を味わったことのない私は、うれしさがいっぱい、胸が大きくふくらむような感激にひたることができた。

このようになすくれた動物愛護の環境ももし、一万人中一人か二人、自分だけならよいと思つて、でたらめをするような不心得者がいたら、このようになすばらし

い情景に接することはできなかったであろう。私は、スイスの人たちの一人一人の教養の深さがしみじみと感じられて、本当に頭の下がる思いがした。

あとで調べてはじめて解かったことはこのリスたちは、もと、ジュネーブ湖畔(レマン湖)のある大きな個人の庭園に住みついていたので、これが公園に解放されるようになってからも、ジュネーブ市民のやさしい善意にささえられて次第に数がふえてゆき、このようなリスの楽園になったのだそうである。

ジュネーブの市内見学のとき、私たちが案内した中国人のガイドの口から、スイス人の人格をたたえる言葉の数々をきいた。すなわち、スイスの人たちはみんな温い心を持っていて、人種、宗教、思想などのちがった人たちをも温く迎えるホスピタリティー(慈愛の心)が、スイスのお国柄であるときり返しいつていたが、これは、単なるお世辞でないことを、わたくしは、はっきり知ることができた。

(北海道拓殖短期大学教授)